

# 英語力向上アクションプラン「小中高英語指導改革プロジェクト」

## 岐阜県全体（高等学校）まとめ

### 1 はじめに

小中高の円滑な接続と一貫した指導の実現を目指し、各学校段階における効果的な指導内容・方法の在り方を研究するために、平成19年度～平成21年度の3年間にわたって、英語力向上アクションプラン「小中高英語指導改革プロジェクト」を実施した。

この事業の主な目的（高等学校）は、以下の3点である。

- 1 高等学校3年間の英語能力の発達変化の推移を経年比較する。（岐阜県及び各研究協力校）
- 2 高等学校における指導の実態を把握するとともに、実施した指導と身に付いた英語能力との関連、つまり、どのような指導がどのような英語能力を育成するのかについて考察する。
- 3 2の考察に基づき、効果的だと判断できる指導については、その指導方法、使用教材をデータベース化する。

事業を実施するに当たっては、県立高等学校4校を研究協力校として指定し、英語能力の発達変化を測定するために、平成19年度入学生全員を対象に、高校1年次から3年次まで年1回、ベネッセコーポレーション Global Test of English Communication（以下GTEC）を実施した。併せて、指導の実態把握及び指導と英語能力との関連を研究するために、教員及び生徒を対象とした質問紙調査を実施した。質問紙調査の作成や、研究協力員会におけるGTECの結果分析に当たっては、関西大学大学院外国語教育学研究科外国語教育研究機構竹内理博士に直接御指導をいただきながら、研究を進めた。

今回研究協力校全体の結果を示す目的は、岐阜県全体の結果として一般化することや各協力校の英語能力の実態を示すことではない。本事業の主目的は、上記の事業目的の2、3により、今後の県内全体の英語指導の改善に資することであることを強調しておきたい。

#### (1) 研究対象：県立高等学校4校

- ・岐阜県立大垣北高等学校
- ・岐阜県立関高等学校
- ・岐阜県立可児高等学校
- ・岐阜県立吉城高等学校

#### (2) 研究期間： 3年間

平成19年度：現状把握 平成20年度：指導改善 平成21年度：検証及び成果普及

#### (3) 研究内容

##### ア 診断・分析

- ・GTECによる英語力診断
- ・生徒及び教員対象質問紙調査による学習方法及び指導方法の分析

##### イ 実践

- ・各研究協力校におけるアクションリサーチの手法を用いた授業改善

各研究協力校においては、生徒の実態から課題を特定した上で、仮説の設定、実践、検証を繰り返すアクションリサーチの手法を用いて指導改善を進めた。

- 各研究協力校における研究協力員会及び授業研究会の実施

研究協力員会は、年間3回岐阜県総合教育センターで開催した。その内2回は小中高合同で実施し、相互の指導内容・方法について情報交流及び意見交換を行った。また、各研究協力員及び担当指導主事が、研究協力校を訪問し、授業を参観した上で、授業研究会を実施した。

#### ウ 研究

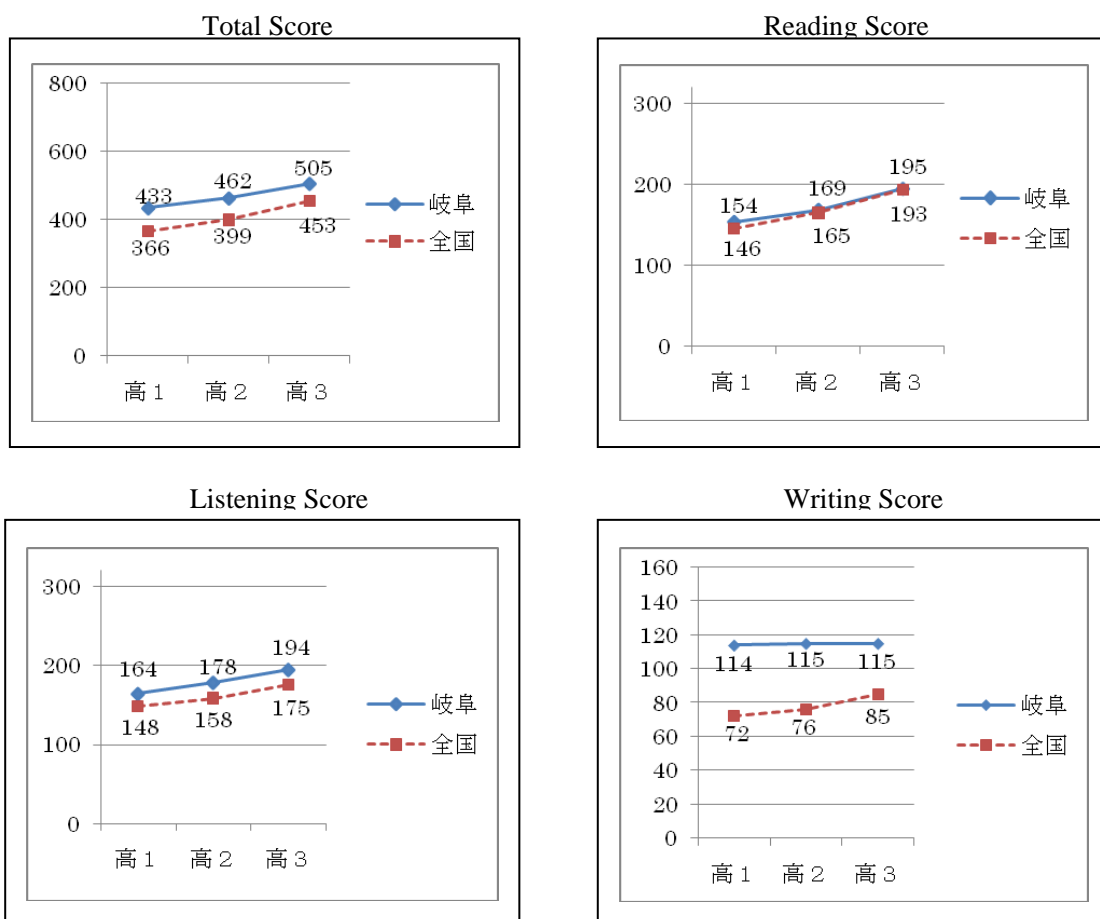
- GTECの結果及び質問紙調査の結果による効果的な指導内容・指導方法の研究

## 2 研究協力校全体の GTEC 結果概要

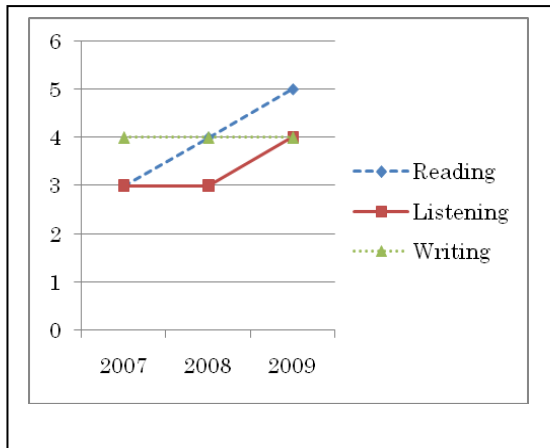
### (1) 成績概況

	H 1 9	H 2 0	H 2 1
受検人数	1,115 人	1,105 人	1,077 人
平均スコア	433 / 800 (満点)	462 / 800 (満点)	505 / 800 (満点)
最高スコア	653 / 800 (満点)	752 / 800 (満点)	755 / 800 (満点)
上位 25%平均スコア	525 / 800 (満点)	551 / 800 (満点)	595 / 800 (満点)

### (2) 技能別経年変化

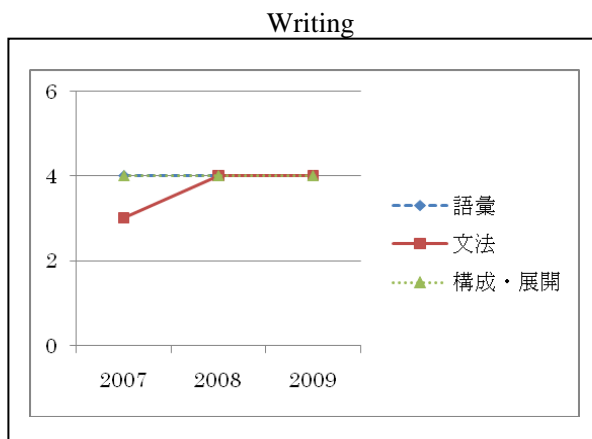
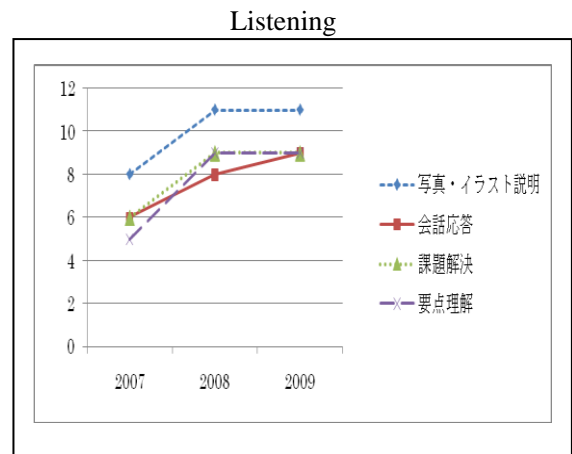
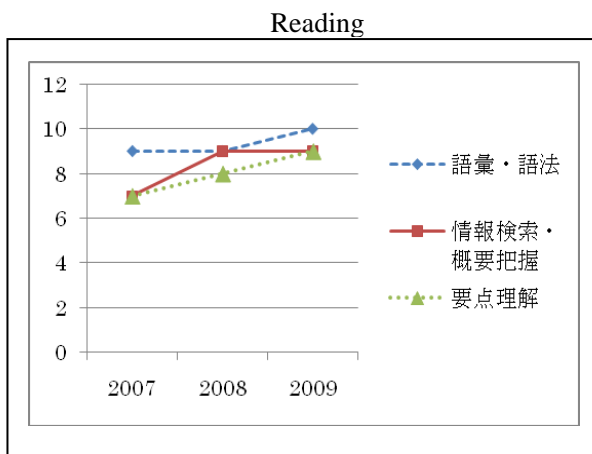


### 技能別グレード経年変化



研究協力校の技能別グレードについては、リーディングは1年次が3、2年次が4、3年次が5、リスニングは1年次が3、2年次が3、3年次が4、ライティングは3年間を通じて4となっている。技能別経年変化グラフにより、研究協力校のスコアと全国平均スコアを比較すると、研究協力校においては、ライティングは、全国レベルと比較して大きく上回っている一方、リーディングスコアはほぼ全国平均スコア並みであることがわかる。また、技能別グレード経年変化グラフからは、3年間の伸長度については、リーディングがもっとも大きく、ライティングはほとんど伸長していない。

### (3) 問題パート別経年変化



リーディングの問題は、単文レベルの英文の中で、文脈的なつながりを理解し、かつ文法的に、また語彙選択上最も適切な表現を正確に判断する力をみる「語彙・語法問題」、英文の全体の概要を短時間で理解する力をみる「概要把握問題」、英文の中から短時間で必要な情報を引き出す力をみる「情報検索問題」、まとまった英文の主旨や要点など、必要な情報を読み取る力をみる「要点理解問題」で構成されている。結果については、3年間で、「語彙・語法問題」が1グレード、「情報検索問題」は2グレード、そして「要点理解問題」は2グレード伸長した。

リスニングの問題は、ある状況や場面、事物を描写した単文レベルの英文を正しく聞き取る力をみる「写真・イラスト説明問題」、不意の問い掛けに対して適切な応答を素早く判断する力をみる「会話応答問題」、状況設定、視覚的情報、音声情報から、その場面で求められている課題を解決する力をみる「課題解決問題」、一定以上の英文を聞き、必要な情報を引き出し、適切な判断を行う力を見る「要点理解問題」で構成されている。結果については、もっとも基本的な力をみる「写真・イラスト説明問題」のグレードがもっとも高い。また、いずれの問題形式においても、1年次から2年次にかけての伸長が、2年次から3年次にかけての伸長に比べて、非常に大きい。

ライティングは、意見及び理由が述べられているかという内容の観点、さらに、内容・場面に応じた適語を使っているか、文法・表現は正しいか、論理的に主張が展開されているか等、「語彙」、「文法」、「構成・展開」という3つの観点で評価される。結果については、経年変化グラフからは、1年次から2年次にかけて「文法」が伸長した以外の変化はみられなかった。

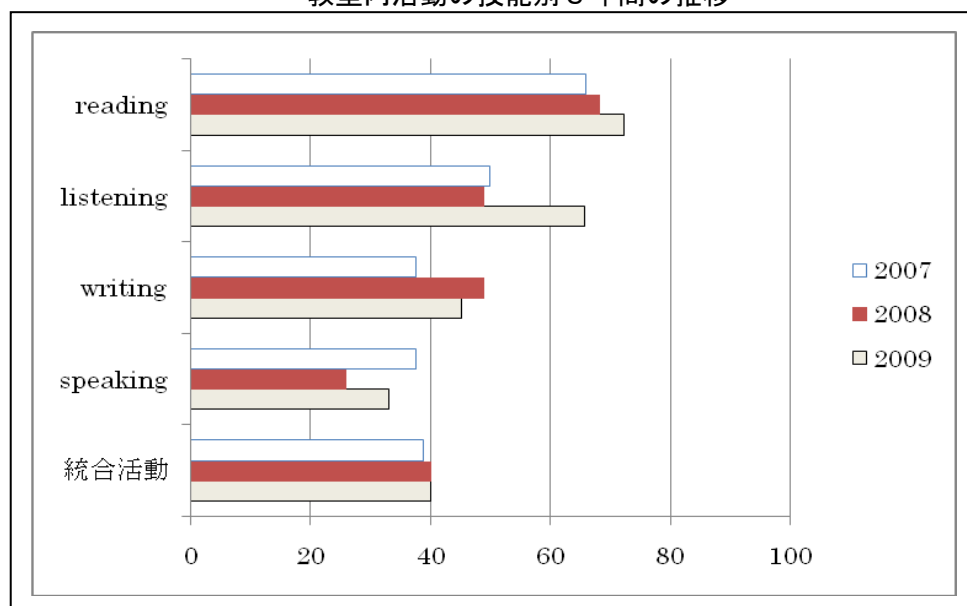
### 3 教員対象質問紙調査結果

研究協力校における指導の実態を把握するために、教員対象質問紙調査を分析した。

#### (1) 教室内における技能別活動の割合

まず、教員対象質問紙調査の各調査項目の内、教室内活動に係る項目に対して、「積極的に行うようにしている」及び「行うようにしている」という肯定的な2つの回答の割合を合計した。そして、各調査項目を、リーディング、リスニング、ライティング及び統合的活動として、技能別に分類し、その3年間の推移を示したのが次のグラフである。

教室内活動の技能別3年間の推移



3年間を通じて、リーディングの活動が最も割合が高く、以下、リスニング、ライティング、統合的活動、スピーキングという順になっている。言い換えれば、リーディング、リスニングという理解を中心とした活動と比較して、ライティング、スピーキングという表現を中心とした活動が少ないと言える。また、技能別にみて特徴的なことは、リスニングの活動が3年生に急に増加していることである。この理由としては大学入試センター試験にリスニングが導入された影響が考えられる。

## (2) 授業で頻繁に行われている活動

次に、どのような活動が授業でよく行われているかを考察するために、各質問項目に対して、「積極的に行うようにしている」及び「行うようにしている」という回答の3年間の平均値が70%を超える活動を、平均値の高い順に抽出した。

番号	領域	質問項目	%
48	reading	読んだ内容や聞いた内容について、英語で質問に答えさせる。	93.9
46	reading	語句や文型・文法の解説をする。	93.7
40	writing	文型や語法について正しく書くことに留意して書かせる。	93.7
41	reading	文章の中で、ポイントとなる語句や文、段落の構成や展開などに注意して読ませる。	91.7
35	speaking	オーラル・コミュニケーション活動に必要となる基本的な文型や文法事項などを理解させ練習させる。	89.6
59	listening	テキストの音声テープやCDを用いたリスニング活動を行う。	87.5
47	reading	主語→展開→結論などの文章構成に注目させる。	85.4
56	reading	スラッシュを入れながら、チャンクを意識した上で、テキストの直読直解をさせる。	85.1
42	reading	未知の語の意味を文法の知識や背景知識を活用しながら読ませる。	76.7
43	reading	目的や状況に応じて速読させ、概要や必要な特定情報を読み取らせる。	76.4
49	reading	主張に対する原因や理由を意識して読ませる。	75.1
26	reading	まとまりのある英語を読んで、書き手の意向、概要や要点を捉えさせ、日本語で発表させる。	74.6
60	reading	シャドーイングや音読などにより、英語を流暢に声に出す活動を行う。	74.6

3年間の平均値が70%を超える13項目中、リーディングが10項目、リスニング、ライティング、スピーキングが各1項目であることから、リーディングにかかわる活動が教室内の活動の中心を占めていることがわかる。ただ、リーディングにかかわる活動の内容をみると、一文一文にこだわった分析的な活動だけでなく、Q41やQ47のような文章全体の構成に着目させ、全体の流れをつかませる指導、Q43やQ26のような概要や要点を把握させる活動、Q42のような背景知識を活用してスキーマを活性化させるためのプレ活動をともなった活動、Q48、Q56やQ60のような様々な音読を通じて、音と意味を結び付ける指導など、多様な活動が行われていることがわかる。

### (3) 経年変化の大きかった活動（増加）

研究指定校において、この3年間で指導がどのように変化したのかをつかむために、質問項目の中で、1年次から3年次にかけて、「積極的に行うようにしている」及び「行うようにしている」という回答が30%以上増加した活動を抽出した。

番号	領域	質問項目	2007	2009
65	reading	気に入った単文表現を覚えさせて、表現を借りて利用させる。	31.3	70.6
26	reading	まとまりのある英語を読んで、書き手の意向、概要や要点を捉えさせ、日本語で発表させる。	56.3	94.1
53	listening	絵や映像を見せて、どのような会話が展開されるか予想させた上で英語の音声を聞かせる。	12.5	47.1
25	listening	まとまりのある英語を聞いて、書き手の意向、概要や要点を捉えさせ、日本語で発表させる。	31.3	64.7
42	reading	未知の語の意味を文法の知識や背景知識を活用しながら読ませる。	62.6	94.1

3年間の活動の変化から見て取れることは、リーディングとリスニングいずれの活動においても、概要や要点を把握する活動と、聞いたり読んだりする前のスキーマを活性化させるためのプレ活動を伴った活動が顕著に増加していることである。

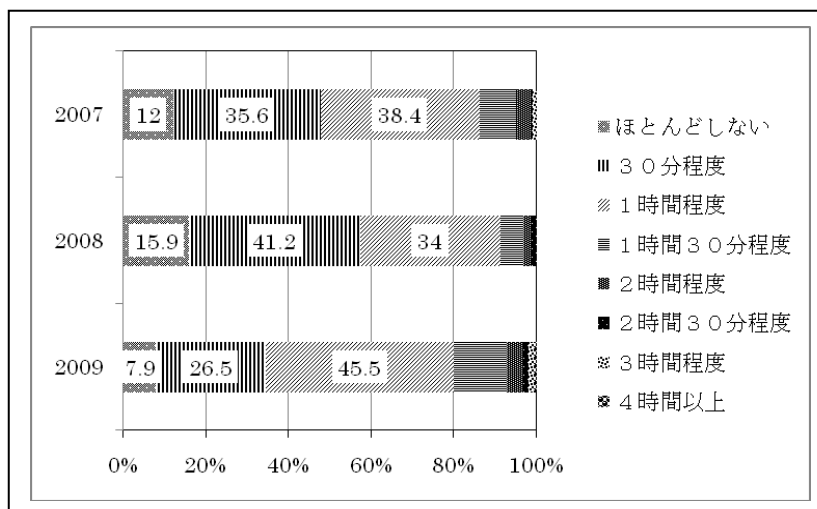
## 4 生徒対象質問紙調査結果

英語の家庭学習時間や、教室内の活動について生徒対象質問紙調査を実施した。

### (1) 英語学習の実態

#### ア 家庭における学習時間

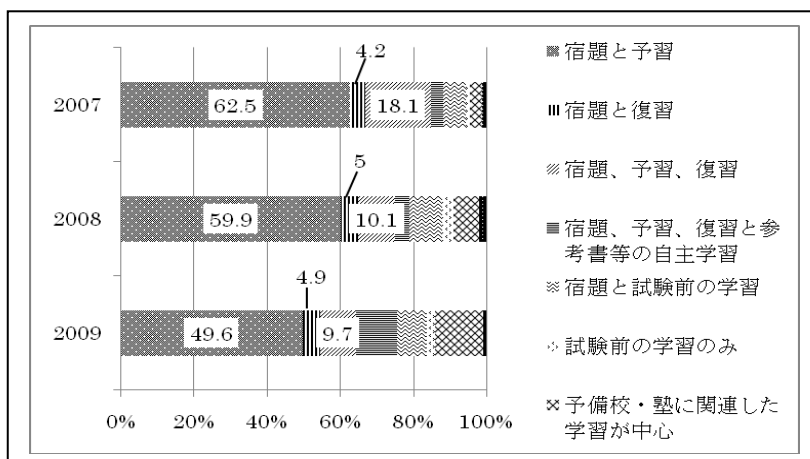
平日の授業以外（予備校・塾を除く）の1日当たりの平均学習時間



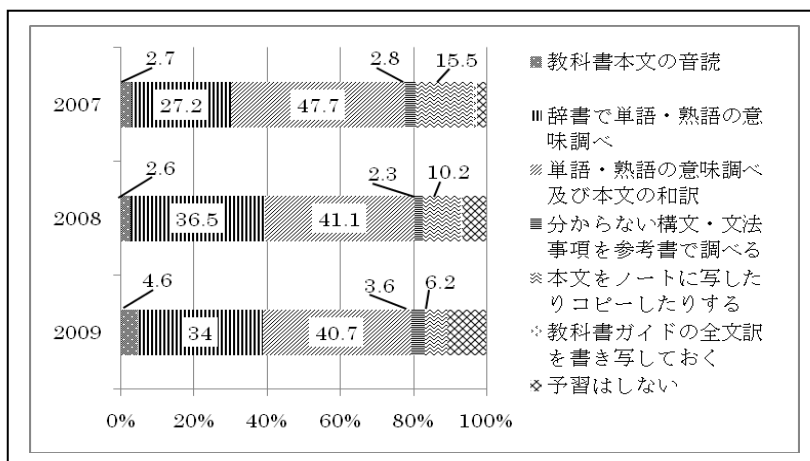
「30分程度」と「1時間程度」と回答した生徒が70%～80%を占めている。さらに、1・2年次には、「ほとんどしない」と回答した生徒が10%～15%おり、生徒は英語の学習に特別多くの時間を費やしていないことが分かる。また、ここでは示していないが、成績段階別の結果により、成績上位層の学習時間を見ても、結果にそれほど大きな差は見られない。

## イ 家庭における学習内容

### 家庭における学習内容



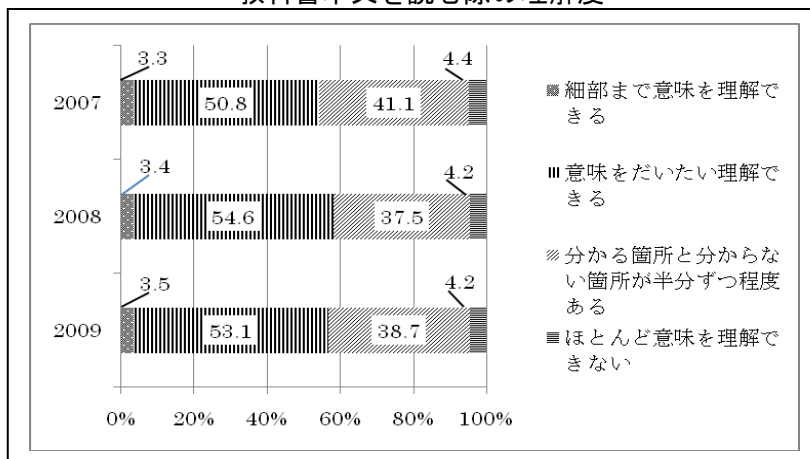
### 予習の内容



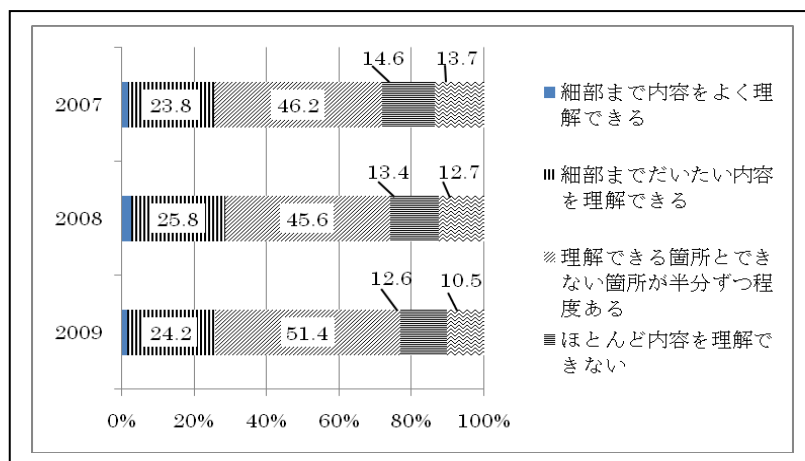
家庭学習の内容は、宿題と予習が中心であり、それと比較すると、復習している生徒は非常に少ない。また、予習の内容については、辞書で単語・熟語の意味を調べておく生徒と、それに加えて本文の和訳をしておく生徒が大半を占めている。

## (2) 教室内の活動についての意識

### 教科書本文を読む際の理解度



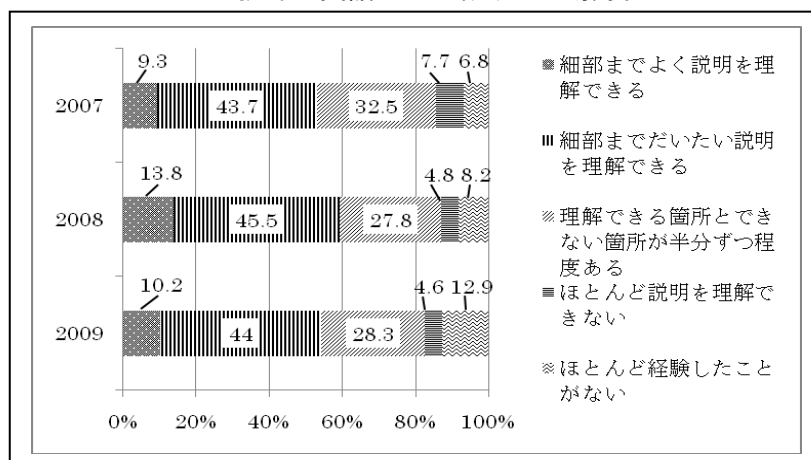
### 教科書本文を聞く際の理解度



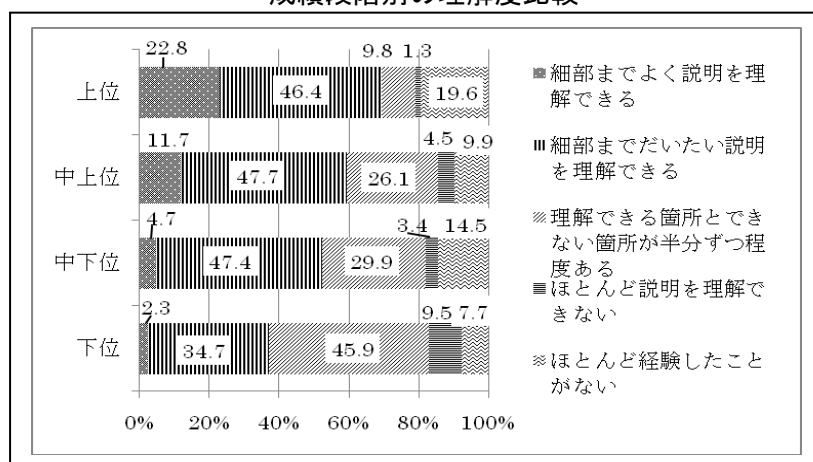
「読むこと」については、「よく理解できる」「だいたい理解できる」と回答した割合が50%～60%であるのに対して、「聞くこと」については、同様の回答の割合が約25%である。このことから、「読むこと」による理解度と「聞くこと」による理解度には大きな差が見られることから、「聞くこと」に対してハードルが高いと感じている生徒が多いことがわかる。これは、聞いて理解する際には、読む際のように、立ち止まったり、後戻りしたりすることができず、意味を認知する速度が求められるからだと考えられる。

### (3) 授業中の教師の英語使用

#### 教師の英語による説明の理解度



#### 成績段階別の理解度比較





教師の英語による説明を生徒がどの程度理解しているかをみたところ、「よく理解できる」と「だいたい理解できる」と回答した割合が約50%～60%であった。「まったく理解できない」との回答は10%未満であるが、「ほとんど経験したことがない」との回答が約10%みられた。また、成績段階別の教師の英語による説明の理解度をみると、成績が下位に向かうにつれて、「よく理解できる」の割合が減り、「半分程度理解できる」の割合が増えていく。しかし、下位層においても、「まったく理解できない」という割合は10%未満である。

#### 4 本事業の成果と指導改善の方向性

##### (1) 本事業の成果

###### (ア) 技能別活動の必要性

3年間にわたるGTECと教師対象質問紙調査の結果から、4技能を伸長させるためには、時間をかけて各技能の直接的な指導を行う必要があることがわかった。

先に示したとおり、研究協力校4校における英語能力は、3年間を通じて、リーディング能力が3から5へ、リスニング能力が4から5へと伸長した。この結果を、教師対象質問紙調査により判明した教室内の技能別活動の割合と照らし合わせると、もっとも活動の割合の高かったリーディングと次に割合の高かったリスニングの能力に伸長が見られたということである。一方、活動の割合が高くなかったライティングについては、グレードの変化は見られなかった。GTECでは測定していないスピーキングの能力についても、教室内の活動の割合がライティングよりも低いことを考えると、それほど伸長は期待できないと考えるのが妥当だろう。もちろん、各技能は相互に関連し合っており、例えば、リーディングの指導がリスニングの能力やライティングの能力に一定の波及効果を与えることは間違いないが、基本的には、書かなければ書けるようにならないし、実際に話さなければ話せるようにならないのである。

###### (イ) アクション・リサーチを用いた指導改善の定着

研究を進めるに当たって用いたにアクション・リサーチの手法が、各研究指定校において指導改善の手法として定着した。授業における様子や授業アンケート、GTEC、質問紙調査による現状把握、それに基づいたリサーチクエスションの設定、課題を解決するための仮説の設定、実践、検証を行い、成果と課題を明らかにする。そして、その結果を受け、新たなリサーチクエスションを設定する。こうしたサイクルを通じて指導改善に取り組んだ結果、各教師は、みずから指導改善に取り組む手法を身に付けることができた。

###### (ウ) 質問紙調査の活用

質問紙調査の活用が指導改善のために非常に有効であることがわかった。研究協力校の複数の担当者は、質問紙調査の実施により、自分自身及び同僚の指導について客観的なフィードバックが得られるだけでなく、それに基づいて、担当者同士が指導の在り方について話し合う機会を持ち、指導方法を共有することができるようになったことにより指導改善が進んだと語っている。また質問紙調査の別の活用法としては、質問紙調査の項目を指導のTO DO LISTと見なし、調査結果から自校で実施していない指導や不足している指導に気付き、その指導を取り入れることで指導改善を進めた。例えば、リーディングやリスニングで活動が大幅に増加した概要把握の活動やプレ活動はこの用法による改善の例である。

## (エ) 小中高合同の研究協力委員会の開催

年に2～3回、小中高の研究協力校担当者が一同に会し、相互の指導について情報を交流する機会がもち、指導改善に生かすことが出来た。

効果的な指導を実現し、将来役に立つ英語を生徒に身に付けさせるためには、自らが受け持つ教育段階だけでなく、入学前の指導方法・学習内容について知るとともに、次の校種における指導方法・学習内容や社会で必要とされる英語力を視野に入れながら指導に当たらなければならない。そうした意味で、高等学校の教員が、生徒に不足していると考える事項について、中学校でどのような指導がなされているのかを尋ねたり、高等学校でどのような指導を受けているのかを中学校の教員が尋ねたりすることができるこうした機会は、小中及び中高の円滑な接続という観点からも大変貴重な機会であったといえる。

## (2) 指導改善の方向性

### (ア) 4技能のバランスの取れた指導の実現

平成25年度から実施される新学習指導要領の趣旨である4技能の総合的な育成を実現するためには、各技能の直接的な指導が必要であるという本事業の成果を受け、今後、教室におけるライティングやスピーキングによるアウトプットの活動を一層増やしていくことが求められる。それでは、大学入試で主にリーディング能力とリスニング能力が試されるという現状と限られた授業時数の中で、この趣旨を実現するためにはどのような方策が考えられるだろうか。一つの方策としては、従来、予習が中心であった家庭学習として、授業の復習活動を取り入れることが考えられる。例えば、授業でインプットした内容をアウトプットする課題を与え、次時の授業で発表等確認の活動を行えば、読んだり聞いたりした内容をより定着させることができる。また、授業時間内における練習時間を短縮することもできる。このように、アウトプット活動をエクストラの活動としてではなく、インプット定着のための活動として位置付けて実施することによって、授業と家庭学習につながりが生まれるのではないかと。また、自己表現する機会が与えられることによって、生徒は学習意欲を高めるのではないだろうか。

### (イ) ライティング指導の改善

中央教育審議会答申によって、「まとまりのある一貫した文章を書く力が十分身に付いていない」ことが課題として指摘されているが、研究協力校において GTEC のスコアの伸長が見られなかったライティングの指導について、今後の指導改善の方向性を考察する必要がある。

質問紙調査から判明したライティングの指導の実態は以下の通りである。

	領域	質問項目	%
40	writing	文型や語法について正しく書くことに留意して書かせる。	93.7
37	writing	自分が伝えようとする内容を整理し、文章の構成や展開に留意しながら書かせる。	62.7
65	writing	気に入った単文表現を覚えさせて、表現を借りて書かせる。	53.9
67	writing	和文英訳の練習をさせ、別解をたくさん覚えさせる。	31.1
66	writing	定期的に英語で日記を書かせて、添削コメントを添える。	12.8
39	writing	場面や言葉の働きを設定して書かせる。	8.8

この結果から、Q40 や Q65 のような正確さや形式を重視した指導と同時に、Q37 のように文章全体の構成や展開にも留意をして指導がなされていることがわかる。しかし、Q66 や Q39 の活動量が少ないことを考えると、書かせる量や頻度が不足しているのではないかと推測される。リーディング能力を向上させるためには、精読だけでなく多読や音読が必要なのと同様に、ライティング能力を向上させるために、今後最も求められるのは、ある程度まとまった量の英文を日常的に書かせる指導だと考えられる。

## 5 おわりに

岐阜県では、毎年8月に悉皆研修である教育課程講習会を実施し、その際、各地区の代表校が研究発表を実施している。本年度から、その研究を進めるに当たり、アクションリサーチを用いた研究をお願いすることにした。その結果、研究発表の質が著しく向上し、多くの参加者から肯定的なフィードバックが得られた。研究協力校だけでなく、この事業で効果的だとわかったアクションリサーチによる指導改善が、他の高等学校で始まったことこそ本事業の最大の成果だといえるのかもしれない。

最後に、3年間にわたる研究を進めるに当たっては、任せるべきところは専門家にお任せした方が効果的な事業が展開できると考え、多くの方々のお力をお借りした。特に、関西大学大学院外国語教育学研究科外国語教育研究機構竹内理博士には、質問紙調査の作成から、GTEC及び質問紙調査の結果分析、研究協力委員会における指導改善の方向性についてのご示唆に至るまで、本当に多くのご指導をいただくことができた。また、高田貴史氏をはじめとして、株式会社ベネッセコーポレーション高校事業部の方々には、事業当初の企画内容の提案から、竹内博士との連絡調整、そのほか細かなところまで、様々なサポートをしていただいた。お二人には、この場をお借りして深く感謝の意を表したい。